

## 8. 転任者の声

### 2校で共有する校舎環境で

中村 茂（葛飾総合）

向島商業高校定時制課程から葛飾総合高校に異動になりました。向島商業高校は、平成19年3月に全日制課程が閉課程となり、平成22年3月に定時制課程も閉課程となり閉校になりました。

私は、平成19年度から閉校に向けた準備と校舎改修工事の中で3年間校務を行なってきました。生徒は全校で34名という状況でした。3年間で進路変更は1名、退学者0名、特別指導は0件でした。年々生徒が卒業して行き、少なくなっていく中で、生徒に寂しい思いをさせないように学校生活を充実させる努力をしてまいりました。平成21年度には、日本橋高校が引っ越して来て、最後の1年間は同じ校舎に二つの学校があるという状況でした。

葛飾総合高校も本所工業高校定時制課程と同じ校舎を共有しています。両校の生徒がお互いに気持ちよく教育活動が行なえるように調整することも副校長の仕事です。同じような校舎環境の中で新しい生活が始まりました。

葛飾総合高校は、東京23区の東部地区に平成19年4月に開校し、今年で4年目を迎える総合学科高校です。150を超える多様な選択科目の中から自分で選択科目を選択し時間割を組み立てて学習するなど、特色あるキャリア教育を推進し、生徒の希望進路実現を目指す「進路名門校」を目指しています。

本校には総合学科高校の特色を生かした6つの系列（国際コミュニケーション、スポーツ福祉、生活アート、環境サイエンス、情報メディア、メカトロニクス）があります。

この系列を中心に、将来の進路に必要な系列選択科目を「基礎科目（2・3年次履修科目）から深化科目（3年次履修科目）」へと系統的に学ぶことによって、明確な目的意識を持った進路の実現を目指しています。

私は副校長として、このような本校の総合学科としての教育内容を理解し、6月から中学校での学校説明会に足を運びました。開校4年目

の総合学科ということで、東部地区の多くの中学校から説明依頼がきています。

会議等も多い学校で、教職員も毎日遅くまで頑張っています。私も、葛飾総合高校の発展に全力で貢献したいと思っています。

### 全日制課程に転任して

難波 伸一（向丘）

昨春蔵前工業高校定時制課程から向丘高校全日制課程へ異動しました。

蔵前工業高校定時制では、中学校時代不登校だった生徒たち、様々な人生経験をしてきた生徒たちが、生徒会の役員を務めたり、立派に就職したり、大学進学したりする姿を見てきました。先生たちの、一人ひとりを大切にする姿勢のたまものだと思いました。

そのような生徒たちに様々な刺激を与え、コミュニケーション能力や学習意欲を高めたいと、進路指導主任、教務主任等と相談しました。そして外部の方々に多数ご来校いただいたり、生徒たちを地域や企業に送り出したりしました。もし少しでも変容させることができたのであれば、大変幸いです。

向丘高校は、文京区にある生徒総数約750名の高校で、学力等に関しては中堅校にあたります。

前任の蔵前工業高校定時制にもしっかりした生徒たちが多かったですが、向丘高校の1学期始業式の静けさや部活動紹介等でのすばらしい紹介に驚きました。それまでのご指導の成果だと思います。

定時制に比べ、仕事量は基本的に増えました。ですが、各分掌等が、すでにルーティンワークとして実施している仕事は、どんどん引き受けてくれますので、その点大変助かっています。

本校の強みは、先生たちが受験指導、頭髪指導、部活動指導等に真摯に努力していることと、美しい校舎だと思います。

校長のご指導、ご鞭撻のもと、どのように強みを活かし、学校を一層活性化していくかにつ

いて、努力しているところです。

教育庁の「土曜日補習の充実に係る外部指導者活用支援事業」を活用し、土曜日講習を昨年12月25日に始めました。1・2年希望生徒対象で、東大大学院生等に国語、数学、英語を指導してもらっています。

今春から、東洋大学、日本大学、法政大学の講義を、2・3年の希望生徒が聴講できるようになる予定です。現在高大連携プロジェクトを中心に準備を進めています。

いずれも、同様のことをすでにご実施なさっている高校の副校長先生方へ、お電話で、あるいはお会いした際に、お話をうかがいました。その節は、ご教示くださり誠にありがとうございます。

今後とも課題をみつめながら、足元をかためつつ、努力してまいりたいと思います。今後もご指導、ご助言いただければ、大変幸いです。

## 全日制課程へ転任して

小野寺 真也（小石川）

平成22年4月に鷺宮高等学校定時制課程から小石川高等学校全日制課程へ異動となりました。前任校の鷺宮高等学校定時制課程は平成22年3月で閉課程となりましたが、最後の副校長として、閉課程までの3年間、活気のある学校の維持に努めました。

着任時は、2年、3年、4年各1クラスの計3クラスという状況で、毎年クラスが減っていく中で、特色の一つである体育祭などの学校行事の継続・活性化も大きな課題でした。

しかし、教職員の工夫・努力と全日制教職員・経営企画室の協力、卒業生や外部の方々の援助により、4年1クラスとなった平成22年6月の体育祭も、4年生、卒業生、教職員の3チーム対抗、総勢87名で盛大に実施できました。

また、9月に全日制と合同で実施している文化祭でも、卒業生の参加や時間講師の先生方等の協力により楽しく実施できました。

18名の生徒と5名の教職員での最後の一年間は、家庭のような暖かい雰囲気の中で、生徒一人ひとりを大切に、教育の原点を学ぶことができました。

平成23年4月からは、小石川高等学校・中等教育学校に着任し、教職員数も多い対照的な学校での職務が始まりました。副校長としての所属は小石川高等学校ですが、小石川中等教育学校も兼務しており、3名の副校長が協力して、小石川高等学校・中等教育学校が一体となった学校経営を行っています。

小石川高等学校副校長としての主な職務は、最後の3年生の卒業・進路実現と、閉校と小石川中等教育学校への円滑な引継ぎですが、小石川高等学校が平成18年度から指定されたスーパーサイエンスハイスクール事業が平成22年度末で指定期間終了となることに伴い、小石川中等教育学校として平成23年度からの新規継続の申請をすることも重要な職務となっています。

小石川中等教育学校ではスーパーサイエンスハイスクール事業を始めとした理数教育の充実に加え、国際理解教育の充実が大きな特色であり、全員参加で行う国内語学研修（2年）、海外語学研修（3年）、海外修学旅行（5年）などの数多くの行事を実施しています。

このような多くの行事の実施に加え、中等教育学校（前期課程、後期課程）という新しい枠組みの中での学校づくりの課題もあり、教職員全員が忙しい毎日を過ごしていますが、生徒の様々な分野での活躍、教職員の意欲的な取り組みなどにより、忙しいながらも非常に充実した日々となっています。

どうかよろしく願いいたします。

## 久しぶりの全日制

原田 明（忍岡）

教頭・副校長として、世田谷泉、足立東、荻窪定、そしてこのたび忍岡に回ってきた。10年7月の勤務が終わり、足掛け12年目となる。

この間、特色ある学校で主として教育課程の開発、充実に意を用いて仕事をしてきた。授業や生徒の指導は教員の仕事である。その仕事をどうしたらやりやすくしていけるかが一貫したテーマであった。総合的な学習の時間で実施してもおかしくない内容の科目がいくつもある学校で、どうしたら教員がそれぞれの科目に意義

を見出し、実践していくかが大きな課題だった。A科目とB科目は要するに総合的な学習ではないか、それなのになぜ総合的な学習をさらに実施する必要があるのか。そういう「青写真」を誰がどういう考えで作ったのか。それを受け、現場で生身の教員が生身の生徒と向き合う困難さをいやというほど味わった。財政が年々逼迫する中で頼るものは何もなかった。教員の力量だけが頼りだったし、教員はよく力量を発揮した。感謝している。

閉課程を迎える夜間定時制での勤務は経済的合理性では割り切れぬ教育の実態に触れた。チャレンジ、エンカレッジが高校改革の表の世界なら閉課程の夜間定時制はその裏側である。伝統ある定時制で最後まで授業をやるという教員の心意気が、あえて学校設定科目を設置し、定年で4年担任をするなど元気のよい学校にした。

この4月からは、52名の教員が勤務する学校に転任した。顔と名前を一致させるのに苦労した。職員室に入りきらないので、教科の準備室等にいる教員の顔と名前がなかなか一致しなかった。しかし、2年の副担任決めやホームルーム合宿の引率者決めをすぐにしなければならなかった。教員が5名の閉課程校からの激変であったが、多くの協力で何とか決まった。

勤務時間が、3月31日までは夜10時だった。翌日は、8時頃出勤したが、どうも出勤時間が遅いと評判が立ったらしい。どこで誰がどのように見ているか分からないものだと感じた。

全日制は、やはり教員数が多く、活発であり、多様な教員の考えや感情が交錯している。副校長は、職員室に席がある。いろいろな人に見られている。どこから矢が飛んでくるのか分からない。反面、塩を送ってくれる人もいる。しかし、その所在は分からない。アンテナを高く、腰を低くして教員に学ばなければならない。

私は、最近、リーダーシップということをよく考える。教員は、ホームルームを経営している。教員は経営者なのである。経営における内部統制は、外部環境によって変化する。したがって、経営者の外部環境を整備することは、学校経営者の仕事となる。それなら、学校経営は教員の経営を支援するため、教員が生徒に対する場面を十分に想定しながら意思決定をするこ

とが必要である。そのため、教員の意向を十分に聞き、建設的な議論ができるよう配慮することは当然であり、アンテナの高さと腰の低さ、そして人への感謝の心は必要な条件である。

リーダーシップは、「上から目線」では決して成立しない。教員数が多ければ多いほど多様な価値観が混在する。まして、高齢教員が多ければ、硬度の高い価値観が多様に存在することになる。教員に親切で、改革の実を挙げるリーダーシップとはどのようなものだろう。難しいことであると感じる今日この頃である。

最後になって、恐縮ですが、縁あって東部Bチームの一員となりました。何卒、今後ともよろしく願いいたします。

## 中等教育学校へ転任して

牧野 敦（九段中等）

本校は都内唯一である区立の中等教育学校で、開校5年目を迎えています。その後期課程（高校課程）の副校長として、4月に転任いたしました。

中高一貫校であることに加え、千代田区として独自に教職員を配置している関係もあり、教員は校長と前期課程（中学課程）・後期課程の各副校長を含め、75名が配置されています。前任校に比べますと3倍近い教員数で、かなりの大所帯となりました。しかし一番の特長は数の多さではなく、先生方一人ひとりの能力が非常に高いことと、仕事熱心であるということでしょう。忙しい学校であることは事実ですが、先生方の向上心とも相まって、校内は常に熱気に溢れています。

区立の中高一貫校であることや、九段下という立地もあって、本校には国内外からの訪問者が多くあります。生徒たちは外部の方と触れ合う機会が多く、学校の立地を生かした企業・大使館・大学との連携授業も多く取り入れているので、人前で話したりすることにもおじしません。事前のコーディネートに先生方は苦労しますが、その分生徒にはプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力が身についています。

本校は区立学校なので、当然ながらTAIMSは

配備されておりません。その関係もあり日頃から意識していないと都立学校の情報から隔絶してしまいます。それを少しでも防ぐためと、高校の教員の場合異動は都立高校と同じであることもあり、高校課程の副校長は都立高校の副校長会に参加させていただいております。今後ともどうぞよろしくご指導のほどお願い申し上げます。

### 全日制副校長に着任して

奈良井 潔（美原）

平成22年度から開校6年目を迎えた単位制普通科高校である旧第1学区にある美原高等学校に着任致しました。（最寄の駅は京急平和島です）新しく、大森東高校と南高校が発展的に統合された高校であるとともに単位制高校ということで、なにかとそのシステム等に慣れるのに苦労しました。教員は9名程多く配置されていて（単位制）、選択講座や少人数・習熟度別授業を多く設定できるなどのメリットがあります。しかしながら、生徒は、何を選択したらいいのか、将来どういう道に進んだらいいのかと戸惑いがちであり、それへの対応として、キャリア教育の充実にも力を入れておるところです。すなわち、総合的学習の時間を利用しての「Gateway To Careers～未来への扉」です。

以上はさておき、副校長として、ハードな毎日を送っている今日この頃であることは間違いない実感です。今後とも宜しくお願い申し上げます。

### 全日制課程へ転任して

小林 孝行（松原）

チャレンジスクールである前任の稔ヶ丘高校に開校より3年間勤務し、第1回の卒業生を見送り松原高校へと異動してきた。

稔ヶ丘高校は、全都で5校しかないチャレンジスクールとして最後に開校した学校で、三部制・単位制・総合学科という経験のない学校に昇任副校長として着任し、すべて手探りの状況で大変な目にあつた（笑）が、学校を作り上げ

ていく充実感があり、やりがいのある学校であった。

一方、松原高校は、創立60周年を迎える普通科中堅高校。昨年より制服の着用と染髪禁止を打ち出し取り組んでいるが、全体的に旧習にどっぷりとつかっている雰囲気、改革・改善に踏み出せないベテラン教員と新しい感覚で実践したい若手教員との考え方の違いが大きい状況の学校であり、先進校より異動してきた私にとっては、驚かされること多い学校である。

数年前には、全入を経験し、授業が成り立たなかった状況を生活指導の引き締めで、落ち着いた勉強できる学校へと変革してきているが、教員の意識改革が進まない限りまた逆戻りしかねないという危機感を持っている。

制服導入完成年度を23年度に迎えて、ここ1～2年が、松原高校の踏ん張りどころであると確信している。

現在、在籍している生徒はちょっとのんびり屋で落ち着いた雰囲気の生徒が多いが、積極性にかけるところがあり進級や進路に向けた危機感が薄い生徒が多い。いわゆるこれが、普通科中堅校の特徴でもあるのかと感じている。

しかし体育祭や文化祭等では、「やる時はやる」松高生らしく頑張つて応分の成果は出せる力は持っているようだ。

さて、幸いいろんな機会でのコミュニケーションを図り副校長としての想いを語っていく中で、企画調整会議や主幹会のメンバーと前向きな意見交換ができるようになってきている。さらに若手教員の積極的な関わりで「新生松原高校」に向けての構想を検討できる雰囲気が出来上がってきている。

現在、本校の将来構想を踏まえた新教育課程の完成に向けて企画調整会議と主幹会を中心に検討を進めており、23年度より導入となる「学力向上開拓推進プラン」とも絡めて検討をし始めているところである。

課題は、挙げれば切りがないが、一つ一つ解決のための手立てを積み重ねていくしかない。今後とも皆様からのご指導、ご助言を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

## 全日制課程に転任して

武田 尚（杉並総合）

「天然資源に恵まれず、少子化で市場と労働力が今後益々縮小していくであろう日本において、今まで享受できた豊かさと安全を維持していくためには、有能な人材の育成と国際化が不可欠であると考えます。これからの時代を任せられるような、自らの力で考え問題を解決していきける有能な人材を、総合学科というシステムの中でしっかり育てていきたいと考えております。」

私は4月の校長就任挨拶を抜粋したこの文章を紹介しながら、本校学校説明会での学校紹介を次のように締めくくる。

「三橋校長の新鮮な発想のもと、教職員一丸となって教育活動に邁進します。」

杉並総合高校は開校7年目を迎える都で3番目の総合学科高校であり、7年目という数字でご想像いただけるとおり大量人事異動期を迎えている。今年度校長の交代に加え教務・生活・進路を含む6分掌中5分掌の主任が交代する中私も飛鳥高校定時制課程からの転任となった。

陣容の一変する中で、東京都における8人目の民間出身校長のもと安定した校務運営が行えるよう連携を図り、連絡を密に行うとともに、必要な情報を提供すること。学校運営に係る課題を検証し、必要な措置を講ずることが本年の私に与えられたミッションである。

「企業文化」と「学校文化」、「常識」と思われるものに対する認識の差は時として顔を出すものの、三橋校長の懐の深さは問題を殆ど顕在化させず、現在は重点支援校の指定をもとに中期的視点による学校活性化のスタートラインに立った。

杉総の朝は早い。朝陽を受けて輝くレクチャー棟を仰ぎ見ながら校舎各入口を解錠して回り、TAIMS開けば今朝も早々に送信された処々英語混じりの校長メールが目覚ましてくれる。体育館・多目的ホールでは朝練の生徒の声が響く。教職員60名、講師20名、市民講師11名が支える杉総の一日がまた始まる。

時に夜遅く浜田山近辺で杯を交わしながら、我々教員が経験し得ない民間「異文化」を拝聴することが、今年の私の密かな楽しみとなっている。

## 全日制課程に着任して

清水 進（神代）

石神井高校定時制課程に4年間勤務し、閉課程業務を終え、4月より神代高校に着任しました。

定時制課程は初めての経験でしたので、生徒の抱えている課題の重さや経済的困難さを深く認識することができました。また、定通生徒体験発表大会や定通文化祭に協力することで、定時制通信制に通う生徒の潜在的エネルギーにも感動させられました。今後は定時制課程で学んだ体験を糧に、日々の学校経営に役立てて生きたいと思っています。

さて、神代高校の雰囲気ですが、生徒が落ち着いていて、教員も一生懸命学習指導・部活指導に励んでいます。特色の1つは、部活動が盛んなことです。ハンドボール部・柔道部・吹奏楽部などが都大会で好成績を収めています。他に60名を超えるダンス部・40名を超えるサッカー一部・少数精鋭の野球部なども熱心に練習しています。特色の2つ目は、学校行事が充実していることです。6月の体育祭に始まり、9月の文化祭・12月の男子柔道大会と女子ダンス発表会、2月の音楽祭まで、クラスがまとまって練習している風景が、頻繁に見受けられます。

神代高校で尽力したい課題は、3点あります。先ず、土曜日補習の強化です。今年度の6月から外部講師による英語・理科の補習を始めました。希望者は多いのですが、部活との兼ね合いで補習継続が課題になりました。次年度は、日程や時間設定に配慮して、補習に継続して取り組む生徒を増やすことが、希望です。授業と補習との一体化によって、進路実現を強化します。

次に、全日制課程と定時制課程との連携です。全日制課程には部活時間延長の要望があるので、全定間の話し合いを緊密に行い、定時制課程の授業に支障が生じないように、部活時間延長を実現したいと思っています。

最後は、学校案内の強化です。本校は中学校訪問には熱心でしたが、塾訪問や塾対象の説明会を行ってきませんでした。今後は塾訪問を強化して、本校の特色を最大限説明していく方針です。

副校長の皆様よろしくお願ひ申し上げます。

## 全日制課程へ転任して

濱田 准一（世田谷総合）

昨春、南多摩高校定時制から世田谷総合高校全日制に異動になりました。前任校では、新補の副校長として、閉課程までの2年間を任され、右も左も分からない中、多くの先輩副校長先生方の御助言と御支援により、何とか使命を果たすことが出来ました。

さて、4月から現任校に着任したわけですが、私にとって経験のない「総合学科」という新しいタイプの学校に日々、戸惑う毎日でした。現在、ようやく学校の全体像が掴めてきたところで、改めて総合学科高校としての現任校の使命と課題を捉え直してみようと試みております。

世田谷総合高校では、あいさつの励行に力を入れており、担任を除く全教員が輪番で朝の立ち番を行っています。私も4月より毎朝、校門で生徒にあいさつの声をかけています。なかには、そっぽを向いて通り過ぎてしまう子もいますが、ほとんどの生徒が元気よくあいさつを返してくれます。また、月1回、風紀委員による「あいさつ週間」が行われており、その週は普段にも増して、あいさつの声が響き合い、明るくにぎやかな校門風景が見られます。通勤途中の地域の方々も、校門の前にずらりと並んだ生徒と教員の姿を物珍しそうに見ながら通り過ぎていきます。私にとって、一日の内が一番気持ちの良い時間であり、毎日、生徒から元気をもたらしているような気がします。

12月に3年生の課題研究発表会が行われました。本校1期生の力が試される行事でしたが、どの発表もよく準備し工夫されたものでした。予定時間をかなり超過したにもかかわらず、寒い体育館の中でほとんどの生徒が熱心に耳を傾けていました。私はこの発表を聞いて、本校の求める4つのスキル（聴く・調べる・まとめる・伝える）が、生徒に着実に身につけてきていることを確信しました。この成果をより大きなものにするためにも、4月に行われた宿泊行事「フレッシュマンセミナー」で1年生が見せてくれた真剣な表情と真面目な姿勢を大切に育て、3年生でその学習の成果を存分に発揮して自らの進路を切り拓いていってくれるよう、教職員とともに全力で取組んでいくつもりです。

## 全日制課程に転任して

平野 みどり（世田谷総合）

前任校の町田高校定時制課程は、16学級あり、夜間定時制としては都内最大規模でした。新補の副校長として3年間、校長も経営企画室も技能主事さんもない夜更け、たった一人の管理職（管理人かも？）として、校舎の施錠に身の細る思いをしたり、困難な生育過程をたくましく乗り越えている生徒の姿に自分の生きる姿勢を反省させられたり、家庭事情に追い詰められている生徒をどうしてやることもできない自分のふがいなさを嘆いたり…。自分の価値観が揺さぶられる日々でした。また、教職員とともに、チームワークよく急場を乗り切った数々の体験も、私の宝物です。

昨春、世田谷総合高校に異動。久しぶりの全日制勤務で、夜型の体内時計を昼型に戻すのは割と簡単でした。が、今度は開校三年目で、未完成部分の多いことが課題です。「何も決まっていないうし、誰も決めてくれない」という教員の不満。「普通は…だ」と発言する教員の数だけ学校現場の「普通」は存在するものだ改めて感じています。連絡不足のための混乱もあります。本校における「普通」を作って周知していくのが現時点での大きな仕事かもしれません。

より良い学校作りのために、色々なアイデアを熱く語る教員もいます。PTA（本校ではSTEPという名称ですが）も、こちらが戸惑うほど熱心に活動しています。生徒は、校内ですれ違ふと大きな声であいさつをするので、来校者から褒められることもあります。まもなく卒業する一期生の進路結果によっては、本校の教育課程や進路指導をさらに改良することも求められるでしょう。

新設校ゆえの課題は多いですが、教員も生徒も秘めた可能性を探りながら蠢いているというあたりに、本校が飛躍する活路を見出せそうです。本校での副校長の使命は、校長の学校経営計画に沿わせた形に、それぞれの教員の得意分野を生かす条件整備をすることだと思っています。幸い、今年の本校は二人副校長。一人で対応に追われていた昨年よりも「楽」……なんて書くと、今度はとんでもなく困難な職場に異動させられそうなので、このあたりでやめておきます。

## 全日制課程へ転任して

寺島 雅夫（国際）

八王子工業高校定時制から国際高校全日制へ異動となりました。定から全へと勤務時間が大きく変わりましたが、帰宅時間が定時制とあまり変わらない自分の不甲斐なさを日々痛感しています。通勤経路も大きく変わりました。これまでは高尾の山に向かって通勤していたのが、池袋～新宿～渋谷周り、都会の人の波に翻弄されています。ラッシュを避けるために7時過ぎには学校に到着するように心がけています。

さて、勤務校の様子も全く異なるものになりました。国際学科ということで工業高校などと同じ専門学科ですが、雰囲気は全く異なります。女子生徒が80%を占めており、至る所で、英語、中国語、韓国語を始めとするさまざまな言語が飛び交っています。外国人市民講師が14名、英語等教育補助員が9名、日本人の英語教員が16名に非常勤教員2名と時間講師1名。外国語科だけで42名！驚きました・・・。生徒も在京外国人生徒、世界各地からの帰国生や留学生などが同じ教室で机を並べて授業を受けています。これが普通の光景なのです。

国際交流活動も活発で、着任早々の4月には韓国から仁川外国語高等学校の生徒240名が来校し、交流行事を楽しみました。国内外を問わず、常に誰かが学校を見学しているという日々です。これも本校では日常の一部です。生徒も気軽に来客の方々に挨拶をしています。自己表現が大好きで常にキラキラしている国際生をいつの間にか応援したくなっている自分に気づかされます。毎日が驚きの連続です。当分は、良い意味で、「今日は何が起きるのだろうか？」と新鮮な気持ちで出勤できそうです。

まだまだ皆様のお力をお借りしなければならぬ若輩です。よろしくご指導のほど御願い申し上げます。

## 全日制課程に転任して

渡邊 英信（総合芸術駒場校舎）

平成22年4月に都立総合芸術高等学校駒場校舎担当として目黒区大橋に着任してまもなく1

年が経過しようとしております。

平成18年度以降、4年間で都立青山高等学校定時制課程と三鷹高等学校定時制課程の2校連続して閉課程業務を行ってきました。

この2校での4年間で振り返ったとき、思うことがいくつもあります。

第一に、在校生や教職員が減っていくなかで、教職員や生徒の「モチベーション」を高く維持してゆくのは容易ではありませんでした。

勤務した定時制課程はいずれも最終年度は1学級でした。教員定数はわずか2名です。閉課程過員1名をつけてもらっても、3名で学校を運営していくことになります。

教員はそもそも勤務する学校が閉課程になることに納得していません。その上に、人数が減れば一人当たり担うべき仕事量が増えます。この状況で閉課程業務を行うことを『納得』させ、様々な業務を率先して取り組むように『意識改革』することは簡単ではありませんでした。

生徒の方は、前年度まで授業を担当していた教員がいなくなり、代わりに講師が授業を担当することになじめない状況があり、その影響を長くひきずることになります。さらに学年が自分たちだけになって、学校行事に取り組む「やる気」を持たせるのにかなり苦勞しました。

第二に、規模は小さいとはいえ、定時制課程特有の課題はやはりあり、生徒の出席確保、欠課時数の減少に苦勞しました。閉課程となるため、最終学年在籍者は全員卒業を目標に掲げました。私が欠席状況データを取り、学級担任にデータを示して欠席者にはすぐ電話連絡をさせて、出席の確保に努めました。定時制課程向けの合同演劇鑑賞教室でも、在籍者全員参加にならなかった苦い思いがあります。

一方、うれしい経験もしました。青山高校定時制課程では、私が指導した生徒が「東京都定時制通信制生徒生活体験発表大会」で都知事賞を受賞し、全国大会に出場できました。これは日頃の苦勞を忘れる、最もうれしい出来事でした。

さて、現在勤務している都立総合芸術高等学校駒場校舎は都立芸術高等学校の中にあります。私どもにとって、都立芸術高等学校は「母体校」であり、大事な存在です。その都立芸術高等学校も都立高校改革推進計画により平成23年度

末に「閉校」となります。定時制課程の閉課程を2校経験した私が今の立場にいることに不思議な縁を感じております。勤務校の職務はもちろんですが、「母体校」と緊密な協力・連携が出来るように頑張らねばと気持ちを引き締めております。

### 全日制課程へ転任して

並木 洋之（成瀬）

三部制の大規模昼夜間定時制の八王子拓真から本校に転任して10か月あまりになります。

拓真ではB勤務で夜の時間帯を担当、その前も夜間定、管候補時代も夜間定に配置されてきましたので、全日制課程はほぼ9年ぶりということになります。生活のリズムはほぼ半日分ずれた感じです。拓真は19年度に開校し、完成年度40学級という大規模校で、毎年異動してくる教員数も多く、講師時数も120時間を軽く越えるという学校でしたので、定から全への異動ではありましたが、むしろ落ち着いたこぢんまりとした学校へ異動してきたという印象です。拓真は、自分のこれまでのすべての経験が直接には参考にならないかのような、何もかも新しいことばかりの学校でしたが、新しいタイプの学校作りの難しさを体験することができました。二人副校長でもあり、校長をはじめとして管理職のチームワークが非常に大切であることも体験しました。

成瀬高校は生徒達も問題の少ない、安定した全日制課程です。教職員の多くはその中で大きな変化を望まない傾向があります。その中で校長は「成瀬復活」をスローガンに掲げ、学校改革に取り組んでいます。校長の学校改革の経営手腕は、一見穏やかに見えますが、確実に成果をあげていく考え抜かれた手法です。補佐する立場ですが大変勉強になります。

土曜授業も定着し、土曜授業実施の条件が厳しくなった来年度以降も継続を決めることができました。管理職の意志がぶれないことと、土曜授業が必要だという意識が教職員の中に定着してきたことが継続決定の何よりのポイントだったと思います。かつては厳しい評価を受けていたようですが、生活指導の充実、奉仕活動な

どで地域社会に参画していく中で、地域からの信頼も回復しつつあります。前任校までと違って、PTAや地域との連携の諸会議に副校長の立場で参加することがずいぶん増えましたが、信頼感の回復を実感する場面が多いです。22年度からは重点支援校の指定を受け、この3年間で成瀬高校の勝負の年になるだろうと思います。この10か月の間にも、土曜授業継続の決定、学校内外への学力保証の試みである「成瀬スタンダード」の開始など、新しい動きが出ています。

早寝早起きは習慣化し、全日制の体に戻ったようです。副校長として、成瀬高校の着実な改革に向けて校長を補佐していきたいと思っています。

### 全日制課程へ転任して

久保 淳（八王子北）

副校長になり、3年目を迎えています。昨年度までは、三部制の砂川高校で勤務をしていました。砂川高校は定時制課程ではありましたが、朝の8時30分から夜の9時まで12時間目まで授業があり、また通信制課程もあるなど、なかなか一口では言い表せない多様なシステムを有している学校でした。1年目はA勤務（8時30分から17時10分まで）、2年目はB勤務（12時30分から21時30分まで）と2年間ではありましたが、昼夜間定時制のすべてを経験することができました。学習時間帯も異なり、様々な生徒がおり、一つの学校として運営する難しさを痛感するとともに、時代とともにこのようなタイプの学校の必要性が増していることも強く感じました。

今年度の4月より、全日制普通科の八王子北高校に赴任しました。生徒たちが遠いところからでも大きな声であいさつをしてくれる、元気な学校です。学校としての力の入れ所は、なんと言っても部活動、行事、そして地域と連携したキャリア教育。生活指導や生徒相談にも積極的に取り組み、教員がひとり何役もこなしている学校です。また全校生徒数600名弱と小規模な学校ではありますが、その利点を生かし、生徒と教員の距離が近いのも特徴です（教員が若いことが理由かも）。この秋、サッカー部が地区の



準決勝まで進みましたが、多くの教員と生徒が駆けつけ、心をひとつにして応援しました。

課題もあります。教員が総勢 37 名のところ、昨年は 11 名の異動がありました。この 2、3 年は 10 名前後の異動が予想されます。どのようにして本校の伝統を受け継いでいくか、「ひとり何役もこなす」バイタリティのある教員をどのように育成するか、校長先生と毎日のように密談を交わしています。

どの学校へ行っても課題の無い学校はありません。副校長として多忙な毎日を経験することで、様々なことに気がつきます。多忙だからこそ見えてくるところがあります。それらの課題に対し、どこから手を入れて行くか、どこから解決していくかは、忙しさで汗を拭く中、ふと見えてくるものだと思います。そう信じて、毎日元気に頑張ります。笑顔を忘れずに。

### 全日制課程へ転任して

上野 努（久留米西）

久留米高校定時制から久留米西高校に異動になりました。前任校は平成 22 年 3 月に閉校を迎え 44 年の歴史に幕を閉じました。その間に 1395 名の卒業生を送り出しました。閉校式典では、日本舞踊家の卒業生に「越後獅子」を演じてもらい、来賓の方々から大きな賛辞を頂戴しました。

久留米西高校は清流黒目川の北岸に位置し、四季折々の花木が美しく咲き誇り、白鳥遊ぶ風光明媚な環境にあります。校章は檜の葉です。本校には約 2,000 平米の雑木林があり、檜・くぬぎ・赤松が生い茂ります。その「檜の葉」が本校の象徴です。

この良き環境にあって、「生徒を伸ばす学校（自分を鍛え、自分が伸びる）」を目指す学校として取り組んでいます。進路決定率は 93% を占め、保護者や地域から信頼を得ています。しかし、進学者の 9 割が指定校推薦・公募推薦・AO です。一般受験によって「ワンランクアップ」を目指す進路指導を目指してきました。具体的な方策としては次の 4 点を始めました。(1) 受験対応の土曜講習の実施。(2) 語学研修の実施。(3) 夏季講習の充実。(4) 外部講師による講演

会<毎学期>の開催。(5) 自宅学習時間の確保。

中堅校にとっては特徴を出し入試倍率を上げることが死活問題となります。本校では「教育情報部」を今年度から立ち上げ、積極的な広報活動を展開しました。HP の更新は 100 回に及び、98000 回のアクセスに及びました。「学校だより」を 10 回発行して、近隣中学訪問（52 中学校）を年 3 回全教員で訪問しました。学校説明会では生徒の「顔」を前面に出すことによって、中学生・保護者に強くアピールしました。

全日制へ異動して 10 か月が経とうとしています。時の流れるのは早く、本校に赴任したのが昨日のようです。日々忙しく慌ただしいのですが、「心にゆとり」を持ちたいものです。「忙中に閑あり」でしょうか。

### 全日制への異動

堀江 徹（武蔵村山）

4 年間の第四商業高校定時制の勤務を終えて、全日制に戻ってきました。この 4 年間に我々副校長を巡る状況も大きく変化したと思います。そもそも、この原稿も定時制と全日制の間の異動がほとんど無かった頃に考えられた企画でしょう。今は、当たり前のように全日制と定時制を副校長が行き来しています。そんな中で、2 年前突然副校長会の運営に携わるようになり、全・定の統合という話を進めるようにもなりました。統合の話自体は全日制的錦織会長から持ちかけられたものではありませんが、定時制の会の運営をしていて実感として困ったのは全・定間の異動があまりに多く、役員を決めるどころか候補もないということでした。統合の話は全体になかなか伝わりにくく、定時制の間では反対の意見も出ましたが、結局推し進めようと思った基にあるのはそんな素朴な実感であったといえるかもしれません。

4 年ぶりの全日制勤務で感じるのは、入ってくる情報量の多さです。週休日の半日振替と、部活動の正式勤務扱いが認められたのは、とても良いことですが、それに伴う事務量は、半端ではありません。毎週目を回しそうです。また、業務の ICT 化も進み、それに慣れるために覚えることもまた、あふれんばかりです。

幸い、勤務校である武蔵村山高校は、生徒は落ち着いているし、先生方も熱心で、とても雰囲気の良い学校で、働きやすく感じています。ですから、仕事のあれがいやだ、これはやりたくないということはないのですが、ともかくめまぐるしい気がします。

聖徳太子はいっぺんに7人の人の話を聞き、対応したといいますが、今の都立高校の副校長は皆、聖徳太子並みではないか、一時に10人くらいの依頼・要求に受け答えしている、本当にそんなことを思っています。

さて、武蔵村山高校の課題というと、やはり生徒の学力向上ということになります。生活指導上の問題を起こす生徒もほとんど居ず、遅刻も減り、授業もきちんと聞いている、いわば受け入れる状態が整ってきている中で、学力をきっちりとしてあげなければなりません。そういう時期にきているようです。なかなか一朝一夕にはいかない事柄ではありますが、校長先生を始め、学校一丸となって取り組もうとしています。

